

優秀賞

柳澤 栞里 (二上小5年)
下田 愛華 (白鳥小6年)

佳作

吉野 帆夏 (道上小5年)
関 知佳 (金町小5年)
依田 仁湖 (東四つ木小6年)

中学校の部

最優秀賞

星 里音 (桜道中3年)

優秀賞

寺田 優奈 (上平井中2年)
長崎 光華 (新小岩中2年)
片山 葵陽 (水元中3年)
渡邊 彩心 (新小岩中3年)

佳作

片山 朝陽 (水元中1年)
岡 珠希 (小松中1年)
御田 佳那 (常盤中1年)
徳永 留嘉奈 (高砂中1年)
田島 里桜 (新宿中2年)

東京都小学校読書感想文コンクールにおいて、上千葉小学校 須貝叡智さん、二上小学校 柳澤健吾さん、柳澤栞里さん、白鳥小学校 下田愛華さん、東四つ木小学校 依田仁湖さんが、特選を受賞し、道上小学校 太田慈雨さんが入選しました。

特選を受賞した5名の中から、須貝叡智さん、下田愛華さんは都代表として青少年読書感想文全国コンクールに出選されました。

また、東京都中学校読書感想文コンクールにおいて、桜道中学校 星里音さんが都優秀賞を受賞しました。



中学校の部 最優秀賞

限りある今を

桜道中学校 三年 星 里音

書名「その日の前に」
著者「重松 清」

この本を読もうと思ったきっかけは祖父だ。

祖父は難病で、肺がもう動かず、酸素濃縮装置をつけて何とか生活している。お盆休みに会ったとき、元気だった頃の姿と酸素濃縮装置をつけた姿の違いに私は戸惑ってしまった。気丈だった祖父が吐いた弱音に祖母は悲しそうな顔をしていた。祖父のいないところで祖母は涙を流していた。

私は祖父と祖母にどんな言葉をかければ良いのかわからなかった。自分の無力さを痛感した。自分には何かなのかずっと思いを巡らせていた。そんな時にこの本と出会ったのだ。

この本は短編小説集で、七編の話が収められている。最後の三話の一つの家族の物語として繋がっている。この物語は、がんばる妻とその夫・二人の息子を中心にそれぞれの人物視点で「死」や「別れ」に向き合う姿が描かれている。

しかし、全ての話に共通していることは、「その日」大切な人との別れの日」が迫る中で、人はどのように生き、どのように「その日」に向き合うか、ということだと思う。特に心に残っているのは、夫が妻の病を知り、余命宣告を受けた場面だ。突然の知らせに戸惑いながらも、何とか明るくふるまおうとする夫。その姿からは、本当は辛いけれど辛さは決して見せないという愛が伝わってきてとても切なかった。また、妻の

自分自身が「逝ってしまった側」であり、家族と離れてしまう寂しさや、残される家族のことを気にかける優しさが伝わってきた。特に、この言葉に感銘を受けた。「日常というのは強いものだ、妻が病気になるってから知った。毎日の暮らしというのは、悲しさを悔しさを乗り越えて、呆れてしま

うほどのものなのだ。」この言葉は、夫が自分自身に語りかけている場面でのものだが余命宣告を受けて改めて実感した「日常の強さ」や「当たり前のありがたさ」について考えさせると共に「その前の日々を大事に生きろ」と示唆していた。人はいつか必ず死を迎える。家族、友人、そして自分自身も死を避けることはできない。でも、「その日」が来るまでをどう過ごすかは自分次第で変えることができる。そこが大事なのだと思う。

自分にとって大切な人が、だんだんと弱っていく姿と向き合っていくこと、それはとても辛く悲しいことだ。ただ、そのことを「辛い」「悲しい」で済ませてしまっただけではない。大切な人と今まで過ごした時間は自分にとってかけがえのない宝物になっているはずである。そうであれば、その宝物に感謝し、その不安が少しでも楽になるように寄り添ってあげなければいけない。

大切な人との「その日」は前触れなく突然訪れることもある。その時、私はきつと激しい後悔を感じるのだろう。もっと優しく接すれば良かった。一言でも感謝を伝えておけば良かった。その人との時間をもっと大切にすれば良かった。

もし、母に「その日」が訪れたら、私は何を思うのだろう。私は母に反抗的な態度をとることがある。忙しい中でも自分に目を向けてくれるのに、適当な返事をしてし

まう。でも、母と過ごす日々は限られたもののなのかもしれない。「その日」は突然訪れる。母と過ごしている何気ない毎日が実はとてもかけがえのないものだ気づかされた。

そして、いつかは自分にも「その日」が訪れるのだろう。その事実を受け入れたとき、これまでの人生で、自分に関わってくれた人達に対する感謝の気持ちを持つことができれば良いのではないかと思う。

命が絶える瞬間、人の脳裏にはこれまでの人生が走馬灯のように駆けめぐると聞いたことがある。私の脳裏を駆けめぐるのは、恨み辛みではなく、幸せな気持ちでありたい。

そのためには、周囲に対して、自分がするべきことを果たしたという気持ちを持つことが必要だろう。だから毎日を精一杯生き、人との関わりを大事にしなければならぬのではないか。

この本は「死」を正面から問題にしている。「死」をただ悲しいものとするのではなく、「生」と向き合うものとして積極的に捉えているのではないかと感じた。なぜなら、この本には悲しみだけでなく、一つ一つの言葉の奥に「あなたを思っている」という一貫した優しさがあり、また、大切な人がいなくなっても、世界は美しく続いていくのだという希望に溢れていたからだ。読んだ後も、心が温かくなり、自分の大切な人達の顔を思い浮かべたくなる、そんな一冊だった。

「その日」は、誰の人生にも必ずやってくる。けれど、私たちはそれを忘れがちな。

でも、これからの私はこの本で学んだ「その日」より前を大切に生きる」という考えと、周りへの感謝を忘れずに、一瞬一瞬を大切に日々、生きていく。

(原文ママ)